

各地で話題の病害虫

マメクロアブラムシ

学名：*Aphis fabae fabae* Scopoli
英名：black bean aphid

1999年11月、宮城県仙台市の露地栽培のホウレンソウ株上に黒色のアブラムシが寄生し、葉裏面の数力所にコロニーを形成しているのが発見され、同定の結果、マメクロアブラムシであることが確認された。

本種は、広食性で吸汁害に加え、各種のウイルス病を媒介するため、ヨーロッパなどではマメ類の重要害虫として知られており、現在 *Aphis fabae* グループ 4 亜種のうちの 1 亜種として取り扱われている。国内ではこの他に、1982年栃木県



宮城県病害虫防除所提供

のイヌホウズキからイヌホウズキクロアブラムシ (*Aphis fabae solanella* Theobald) が確認されている。

雌成虫は、体長 2 ～ 3 mm、生体での体色は光沢のない黒色から暗褐色で、しばしば腹部に白色のロウ物質による斑紋を有する。外見はワタアブラムシによく似ているため、肉眼での識別は困難であるが、実体顕微鏡を用いた尾片の刺毛数等の観察で判別できる。

本種は世界中に広く分布し、寄主植物は非常に多く、ニシキギ科、マメ科、アブラナ科及びアカザ科等の植物がある。

被害は、口針を葉や茎の篩管部に挿入し植物汁液を吸収するため、組織の正常な発育が妨げられる。また、媒介ウイルスによる黄化や葉巻等の症状も生じる。

ホウレンソウのアブラムシ類に対する登録農薬は、ダイアジノン乳剤、ペルメトリン乳剤、マラソン剤及びDDVP乳剤等がある。

イチゴ根腐萎凋病

学名：*Cylindrocarpon destructans*
(Zinssmeister) Scholten

1998年12月、宮城県米山町のイチゴ養液栽培施設において、萎凋、わい化及び枯死する株が発生した。宮城県園芸試験場においてその原因を調査したところ、*Cylindrocarpon destructans* によるイチゴ根腐萎凋病であることが判明した。

本病は1970年代にイチゴの土耕栽培において全国各地で発生して問題になったが、土壌消毒剤や肥培管理等の効果により問題にならなくなっていた。今回は、養液栽培で発生が見られ注目された。

宮城県ではその後、気仙沼市、亘理町で発生が



宮城県園芸試験場 菅野博英氏提供

確認された。また、栃木県内でも1999年5月イチゴ養液栽培施設で発生が見られた。

本病は果実が肥大する頃から発生し、収穫後期まで続く。特に結実により株に負担がかかる収穫期以降や、温度が上がる4月以降に見られる。また、排水不良の所に発生しやすく被害も大きい。

症状は、下位葉が黄化萎凋し、のちに株全体が萎凋後枯死するものと、草丈が短小で葉も小さく下位葉が黄化し、わい化するものがある。両症状とも根部は褐色から黒色に変色するが、クラウン部や葉柄などの褐変は見られない。

本病の防除としては、被害株を早めに除去する、水管理を適正に行い、過度の給液を避ける、ロックウール・資材等の再利用は行わない、定植前にベノミル剤の根部浸漬処理（1,000倍液、10分間：萎黄病と同時防除）を行うなどの方法が有効である。